

佐賀大学全学教育機構紀要 第5号 (2017)

小城鍋島文庫蔵書解題稿 (二)

中尾 友香梨
中尾 健一郎

An Annotated Bibliography of Books in the Ogi Nabeshima Collection (Part 2)

Yukari NAKAO, Kenichiro NAKAO

小城鍋島文庫研究会 (<https://sagakoten.jindo.com/>) では、科学研究費基盤研究 (C) 「地域の文化財群としての小城鍋島藩蔵書の研究——その全貌の解明と具体例の分析」(研究代表者＝中尾友香梨、課題番号15K02251) を得て、平成二十七年(2015) 年度から同二十九年(2017) 年度にかけて同文庫蔵書に対して書誌調査を実施し、成果の一端を解題の形式で広く紹介している。本稿はその第二稿であり、日本漢詩文の書籍を扱った。

解題は当文庫の現況を報告することを主旨としており、したがって小城鍋島文庫蔵書固有の情報の記述に重きをおいた。漢字の表記は特別な場合を除いて通行の字体に統一し、書き下し文は現代仮名遣いを用いた。執筆にあたっては、中尾友香梨が『詩林良材』『不忘集』『節序詩集』、連携研究者の中尾健一郎が『和歌題絶句』『玉山講義附録』を担当した。

【キーワード】 詩林良材、不忘集、節序詩集、和歌題絶句、玉山講義附録

詩林良材 (しりんらうまにやう)	097-01 刊 著者不明	詩作嗜／(中略)／品題部凡十條／題定法 句題法
半紙本、五卷五冊 (乾三卷・坤三卷の全六卷六冊のうち乾之下		／(後略)』
欠)。全冊原表紙。原題簽剥落。題簽現状、		乾之中 題簽跡に打ち付け墨書「詩林良材 乾之中」
乾之上 後補題簽、墨書「詩林良材集 乾上中」		添え題簽跡、打ち付け墨書「押韻部」
原添え題簽、墨刷「卷之一／詩学部凡五條／詩会式		坤之上 後補題簽、墨書「詩林良材集 坤」

添え題簽跡、空白

坤之中 後補題簽、墨書「詩林良材 五」

後補添え題簽、墨書「時令／春夏秋冬／節序／元日上巳端午重陽」

坤之下 後補題簽、墨書「詩林良材 六」

後補添え題簽、墨書「花木／梅牡丹蓮花（後略）」

題簽の状況からもわかるようにおそらく入本（補配本）。つまり乾之上・坤之上、乾之中、坤之中・坤之下は元來別組の書籍であつたと見られる。後補題簽等の筆跡もそれぞれ別人のもの。各冊に蔵書印「小城蔵書」（同一）。内題・序題・目録題・柱題・尾題すべて「詩林良材」。見返、

体制枚挙 套字具陳 出俗入雅 變旧為新

学詩門戸 後生之珍 由是積力 庶邇古人

詩林良材

新刊名公精選大全捷徑

媒教軒

題の「詩林良材」と蔵板元の「媒教軒」以外は書肆の宣伝文句。

序文末「貞享丁卯仲春甲午 村田通信」。貞享丁卯仲春は貞享四年（一六八七）二月。村田通信は村田匏庵、漢学者。刊記、

貞享四稔太歳旅丁卯五陽月成焉

王畿堀河書林

植村藤右衛門刊

小城鍋島文庫本は右刊記で終わっているが、この刊記の後に同年三月三日付の平井梅郊（名は誠之）の跋文が附されているも

のもある。また、宝永三年（一七〇六）の後編十卷十冊、文化八年（一八一二）の合訂本（正編坤三卷、後編十卷）もある。内容は漢詩作法に関するもの。漢字片仮名混じりの平易な文体で書かれており、伝本が多く、広く読まれたと見られる。

文化八年版の岡崎元軌序に「詩林良材村田翁所^ハレ著^ス」とあることから、『国書総目録』等は著者を「村田通信」とするが、村田序に「問 書林某袖^{ニシテ} 一帙^ヲ 來就^{レテ} 余計^ル 之^ヲ（中略）書林欲^ニ 梓^{シテ} 便^ニ 初学^ニ、余嘉^{シテ} 其志^ヲ 為^ル 之^ニ 序^ス」とあり、平井跋（小城鍋島文庫本欠）にも「一日書林某懷^{ニシテ} 一編^ヲ 來出^テ 示^{シテ} 請^{フテ} 予訂^ス 正^{セシム} 焉^ニ」とあるので、書肆の編纂と見るのが妥当か。

なお、小城鍋島文庫本には頭注の形式で「曹植字子建／魏文帝之弟也巧文」「潘岳字安仁／晋人」「賢哉衛君」「直哉韋斌」などと墨の書き入れがあり、すべて同一人物によるものと見られる。但し書き入れは乾之中、坤之中、坤之下のみに見られる。

不忘集（ふぼうしゅう）

97-88 写 鍋島直能編

大本、清朝仕立、一卷一冊。正装型押原表紙。原題簽剥落。題簽跡に打ち付け墨書「不忘集 全」。見返・目録・跋文・奥書なし。蔵書印「荻府学校」。

序に「世人の閑に乗じて斯の境に來たる者も、亦た敢えて拒まず。敢えて之れを拒まざれば、來たる者、其の樂しみを樂しみ、又た敢えて俗ならず、或いは裁するに詩賦を以てし、或いは送るに和歌を以てす。予や、隱棲の暇、他の塵事を忘れ、偏に淡泊の餘味に甘んず。此れに前^{まへ}んじて、送る所の詩歌若干篇有れ

ば、其の善悪と貴賤を論ぜず、彙めて以て巻と為さんと欲す。時に送るに詩歌を以てする人有り。之れを披けば、則ち予を賀する所のものなり。古に云う、喜び有れば則ち物に名づくるを以て、忘れざるを示すなりと（蘇軾「喜雨亭記」）。因りて此の篇に冠して以て之の詩歌を賀す。時に延宝辛酉春三月」（原漢文）云々。落款印二顆、陰刻方印「藤」、陽刻方印（印文未詳）。延宝辛酉は延宝九年（一六八一）。所収内容、

中大夫伯固（佐賀藩三代藩主・鍋島綱茂）の漢詩と和歌

朝散大夫藤子（小城藩二代藩主・鍋島直能）の漢詩と和歌

藤子女（直能の娘）の和歌

栖聖沙門碧湖（黄檗僧・碧湖元達）の漢詩

鍋島正之（直能の子）の漢詩

持福隆昌（未詳）の漢詩並びに序

中大夫伯固（綱茂）の漢詩並びに序

曾谷格元（未詳、黄檗僧か）の漢詩

光明梅堂（未詳、黄檗僧か）の漢詩

朝散大夫藤子（直能）の漢詩

弄此（未詳、黄檗僧か）の漢詩

蘭室（未詳、黄檗僧か）の漢詩

禪関（黄檗僧・禪関元青）の漢詩

下川文蔵（小城出身で朱舜水に学んだ下川三省）の漢詩

山田玄寿（小城藩医）の漢詩

梅嶺（黄檗僧・梅嶺道雪）の漢詩と漢文

以上、直能の還暦や隠居を祝う親族・知人らの詩歌、及びそれ

に応酬した本人の詩歌、また直能の庭園（小城桜岡）に遊んだ友人たちの詩歌など。
したがって序文と編纂はいずれも直能本人によるものと判断される。つまり本書は小城藩二代藩主・鍋島直能がその晩年に親族・友人らから贈られた詩歌及びそれに応酬した自らの詩歌を一冊にまとめた私撰集である。

節序詩集（せつじょしゆ） 〇97-38 刊 山本泰順編

大本、十一卷十一冊（全十二卷十二冊のうち卷十一欠）。全冊原表紙。卷十のみ原題簽「節序詩集 卷之十」、他巻は題簽跡に打ち付け墨書「節序詩集 一」等。内題・序題・目錄題・柱題・尾題すべて「節序詩集」。見返・跋文なし。蔵書印「荻府蔵書」。序文末、

明暦丁酉歲冬月

雒陽教授 山本泰順尚勝撰

明暦丁酉は明暦三年（一六五七）。山本泰順は京都の漢学者、

尚勝は名。刊記、

寛文七丁未歲仲春日 洛下 書堂風月行梓

同じく明暦三年序をもつ無刊記本もあり、小城鍋島文庫蔵の寛文七年（一六六七）版はその後刷と見られる。

中国の唐・宋・元・明の詩を歳時ごとに編んだ詞華集。目錄、

卷之一 春令門／序 立春

卷之二 元日

卷之三 入日 穀日 上元附元夕

卷之四 社日 花朝 上巳

卷之五 寒食 清明 晚春

卷之六 夏令門／立夏 端午 伏日 晚夏

卷之七 秋令門／立秋附秋日 七夕 中元

卷之八 社日 仲秋附十四夜十六夜

卷之九 重陽上

卷之十 重陽下

卷之十一 冬令門／立冬 冬至 下元 除夕

卷之十二 拾遺

編者の山本泰順は『洛陽名所集』（万治元年「一六五八」序）の著者。山本洞雲とは別人。初め冷泉為景に和歌と漢学を学び、後に儒者宇都宮遯庵に師事し、若くして名をなしたが、有徳人の娘を娶るため長崎糸荷に似せた偽荷を質入れたことで、禁裏絵師であった父友我とともに磔刑に処せられた。寛文九年、三十四歳の時である。したがって、本書が成立したのは泰順二十二歳の時である。

【参考】安田富貴子「山本泰順考」（『橋女子大学研究紀要』第四号、一九七六年十月）、市古夏生「山本泰順と中川喜雲」、同「冷泉為景とその周辺」（ともに『近世初期文学と出版文化』若草書房、一九九八年）

和歌題絶句（わかだいぜっく） 097-25 刊 菊池五山著

中本、一巻一冊。原表紙。原題簽剥落。題簽跡に打ち付け朱書「和歌題絶句」。内題・柱題ともに「和歌題絶句」。序題・尾題・跋題なし。目録・奥付なし。見返、

経 東叡／大王懿覧（朱刷）

東叡大王とは、江戸時代の宮門跡の一つである上野東叡山寛永寺の貫首を漢文調にいう語。日光山輪王寺門跡を兼務し、比叡山延暦寺天台座主に就任することもあり、宮家出身者または皇子が就任した。「経」字の後に、敬意を示す闕字が設けられているゆえんである。蔵書印「姬水娛観」。序文末、

天保十年復月下浣七日

一斎居士佐藤坦識

関研書

天保十年復月下浣七日は一八三九年十一月二十七日。佐藤坦は儒者佐藤一斎。関研は近江出身で膳所藩の江戸藩邸に詰めていた儒者、関藍梁。研は名、通称は研次、藍梁と号す。十三歳の時に江戸に下って昌平黌で学び、また市河米庵に師事して書を善くした。

巻頭の著者表記は「五山 池桐孫 無絃」。五山は号、桐孫は名、無絃は字。『五山堂詩話』で知られる漢詩人、菊池五山。

跋文末、

天保己亥臘月亦山吉川有跋

江山宝書

天保己亥臘月は天保十年十二月。この時、五山はすでに七十一歳。吉川有は未詳、漢詩人仲間か。江山宝は関根江山、名は為宝、別号に趙斎、揮月堂など、書家。

巻末の匡郭の外に「邨嘉平刊」とあり、木版彫刻の第一人者として名声を得ていた江戸の字彫り師・木村嘉平が版木を彫った

ことがわかる。第二代（？―一八四〇）か。

序跋によれば本書は、当時すでに漢詩人として名を馳せた五山老人が、時々東叡大王の詩歌の席に招かれ、命じられるまま和歌の題で絶句を作り、数年のうち数百首となったので、漢詩人仲間から出版を勧められ、東叡大王の許可を得て上梓したものであるという。春部十五首、夏部二十四首、秋部二十七首、冬部九首、恋部十三首、雑部十二首、計百首の和歌題絶句が収められている。

玉山講義附録（ぎょくざんぎょう）

097-34 刊 山崎闇斎著

大本、三卷三冊。第一冊表紙・題簽ともに欠。第二・第三冊原表紙、原題簽一部残存、墨刷「玉山講義附録」。内題・柱題は所収内容に合わせて「玉山講義」「玉講附録」等。見返・目録・奥付なし。各冊に蔵書印二顆、「荻府蔵書」「荻亭蔵書」。所収内容、

第一冊 「玉山講義附録序」「玉山講義」「玉山講義附録上」

第二冊 「玉山講義附録中」

第三冊 「玉山講義附録下」、無題跋、「玉山講義附録跋」

序文末「寛文十二年壬子仲春 弘文学院学士林恕 謹序^{テス}」。林恕は林鶯峰。「玉山講義附録跋」の末尾にも「寛文壬子仲春 弘文学院学士林恕 謹跋^{テス}」。

無題跋には「乙巳の歳、玉山講義を表章し、且つ其の講義と参驗すべき者を抄出して、名づけて玉講附録と曰う。（中略）重

陽の日に成る。山崎嘉、跋す」（原漢文）。乙巳の歳は寛文五年（一六六五）、嘉は山崎闇斎の名。同丁未尾に「寿文堂刊行」。

『玉山講義』は南宋の朱熹が晩年に江西省の玉山で学問の本質を説いた講義録。三千字足らずの短文である。その精神を補うため、保科正之が山崎闇斎に命じて『朱子文集』『朱子語類』の中から適切な文章を採録して附録としてつけ加えさせて成立したのが本書である。小城鍋島文庫本には夥しい数の墨の書き入れがある。

【参考】真壁俊信「玉山講義附録 解題」（『続神道大系 論説編 保科正之（五）』神道大系編纂会、二〇〇五年）

中尾 友香梨（佐賀大学全学教育機構）
中尾 健一郎（熊本大学教育学部）

注

（1） 第一稿は白石良夫「小城鍋島文庫解題稿（二）」（『佐賀大國文』第四十四号、佐賀大学国語国文学会、二〇一六年三月）